優　秀　賞

「自分で選んだこと」

奈良市立富雄第三中学校　３年　黒田　菜花

私の大好きな兄と姉は二人とも不登校だった。約十年経った今でも覚えている。私の家族五人の気持ちや発言や、表情を。

お兄ちゃんは小学校高学年から。小さな私には何で悩んでいるのかも、何で泣いているのかも分からなかった。みんなが辛くて、みんなが逃げ出したかった。よく、覚えていない。

お姉ちゃんは中学一年生の途中から。何が起きているかも分からず、誰も幼い私には教えてくれず、私はいつも通りに毎日登校した。

お兄ちゃんもお姉ちゃんも私には何も言わなかったけど、私は両親の様子が印象に残っている。とても辛そうで、かける言葉や寄り添える言葉を毎日探していた。私は妹だから、ただ何もわからないふりをしていた。

中学校に入るとき、「絶対に不登校にはならない」と、周りの子が新しい世界にわくわくしている中、私だけそんな目標を誰にも言わず、密かに掲げていた。誰かを、家族を、傷つけないために。

でも私は中学二年生が始まって二か月で学校に行けなくなってしまった。毎日自分を軽蔑して、責めて、自分の一番の敵が自分になってしまっていた。母をまた、傷つけてしまったと涙が止まらないし、申し訳ないのに、登校への一歩が私にはしんどく、重たかった。

そんなときに、離れた所で大学生活を送っているお兄ちゃんとお姉ちゃんから、それぞれ頻繁に連絡が来るようになった。「ごめんね、色々考えさせてしまって。今はすごくしんどいと思うけど、勇気を出してその先のことを考えてみたら、今がすごくちっぽけに見えて、将来を楽しみに思えると思うよ。何もしないのはよくない。少しずつ何かしてごらん。」と二人は私に言ってくれた。私はこの言葉を聞いて、「私は学校のみんなに追いつきたい」と部活に顔を出してみたり、自分一人で勉強を進めたり、進み始めることができた。

とりあえずの学習が追いつき、そんな小さなことでも少しずつの自信にして、私は中学三年生になったこの四月から、またもう一度学校に来ることができている。遅刻や早退、欠席もあるけれど、少しずつ自分の気持ちとうまくバランスをとって、家族や友達、先生に支えられながら、毎日毎日精一杯登校している。

ずっと一年間学校を休んだことを後悔していたし、家族にまた迷惑をかけてしまったと思っていた。でも今、一学期の半分以上、学校に来る生活を送って、この一年間は無駄ではなかったと思えるようになってきた。人の気持ちや日々の生活の大切さに気が付けるようになったのは、この時間を過ごしていないときっと得られなかったもので、今の私の一部にはなっていなかったと思う。でも私にとってここで得られたものは、人や物事の大切な所をしっかり自分の目で見る力になったと思う。以前の私は、何でもかんでも一個一個ていねいに、集中していたけど、それをずっと続けるといつか崩れてしまう。だから自分の気持ちと物事の大切な所を見分けて取捨選択し、たまに悪知恵をきかせてずるしながら、自分らしく、ゆっくり生活していけばいいと思う。

私は、私の自分勝手を家族の優しさに甘えて、一年間学校に行かなかった。今でも自分の人への甘えに後悔しているけど、やってしまった責任も、これで得られた自分の考えもどちらも自分のものにして、大切だと思えるようにしたい。そして、私のこの経験がいつか誰かの気持ちを軽くできたらと、心から思う。

この家族で、私が選択してきたことで、この生活で、良かったと思えるよう、これからも精一杯がんばっていきたい。